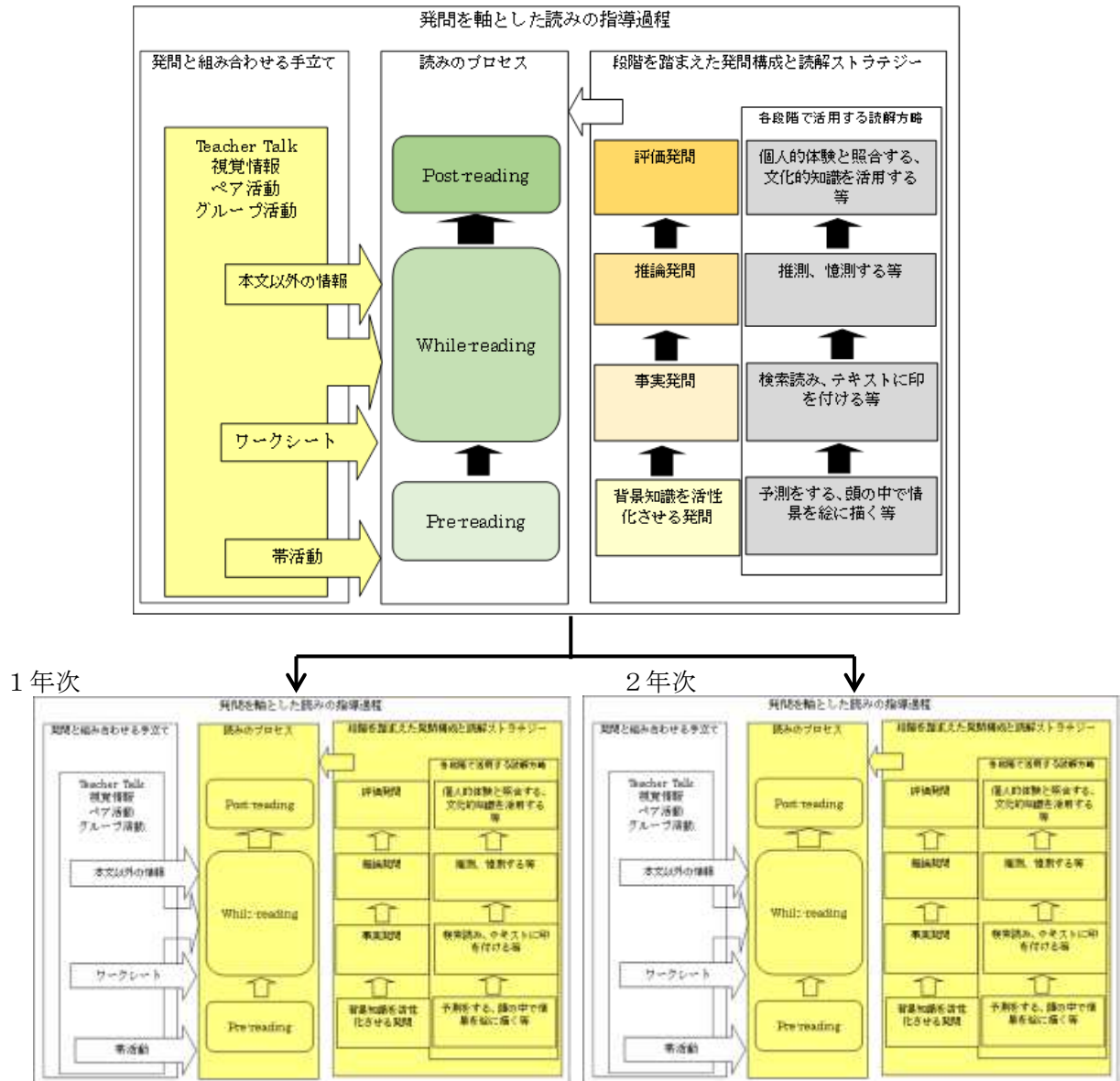


5 研究のまとめ

(1) 考察

研究1年次は、読みのプロセスを踏まえた発問構成を軸に言語活動を行うことによって、生徒の豊かな表現につながる事が分かりました。認知処理レベルに応じて計画的に発問を行うことで読解ストラテジーの活用が促進され、生徒の深い読みにつながる事が明らかになりました。また、発問と組み合わせる **Teacher Talk** や視覚情報も、生徒の思考を促す働きをすると考えられます。

2年次は、引き続き読みのプロセスを踏まえた発問構成を軸とした言語活動に焦点を当てつつ、発問と組み合わせる手立ての有効性に着目し、生徒の思考をスムーズに促すことができるよう研究を進めました。ICTによる視覚情報の提示や **picture cards** は、「頭の中で情景を描く」などの読解ストラテジーの活用を促進します。また、中学校でも「授業を英語で行うこと」が基本となります。**Teacher Talk** は生徒の良質なインプットとなり、言語の習得においても重要な要素であることが明らかになりました。事実発問は英語で行う方が生徒の理解を助長します。C群の生徒にとっては、聞き取った英語を教科書本文から探して答える活動は認知処理の負荷が少なく感じます。また、読みの段階に応じた発問構成を軸に言語活動を仕組み、生徒とやり取りを行いながら読みの指導を進めていけば、1年生から英語による授業展開は可能でした。



(2) 成果と課題

ア 成果

- ・読みのプロセスを踏まえた発問構成を軸として言語活動を行うことによって、「書かれた内容から書き手の意向を読み取り、読み手としての感想や意見を書くことができる」という目標に近づく生徒の姿が見えました。
- ・中学3年生になると、限られた発問だけで読解を進めていきます。読解ストラテジーの「テキストとの相互作用を行う（Interact with Text）」を自分だけで行うようになり始めたといえます。
- ・Teacher Talk は良質な Output に表出されることを明らかにすることができました。

イ 課題

- ・本研究では、「何を読み取るか」というよりも「どう読み取るか」といった読むことの技能を向上させるねらいがありました。今後は、生徒自身の自立した読みにつなぐための橋渡しとなる手立てを整理していく必要があります。
- ・読むことの技能を向上させるためには、精読と多読のバランスが重要になってきます。本研究は精読に焦点を当てました。多読の際にも、適切に読解ストラテジーを活用できるような指導を考えていく必要があります。
- ・中・高6年間を見据えて、各段階における読むことの技能を、系統立てて育成していく必要があります。

(3) 表現力の向上につながる提案

2年間の研究を通して、読みの指導を充実させ、豊かな表現につなげる授業づくりのポイントが分かりました。提案という形でまとめました。

ア 帯活動でのパターン練習

帯活動を活用してやり取りの型を定着させましょう。例えば、自分の意見とその理由を答えさせる練習は、生徒には定型文を与えて繰り返し練習します。授業でも、生徒に意見を求める時には、**Why do you think so?**と問い掛け、**Because .../ I think I have some reasons. First, Second, ... / That is why I think ...**などを用いて答えさせます。

イ 単元構成の工夫

読みに集中させるため、ある程度まとまった英文に慣れるため、そして本文の異なる情報を結びつけて推論発問に答えさせるために、語いや文法などの新出の言語材料を読みの指導の前に行うのも有効です。未知の語句や表現は、生徒の思考をストップさせ、生徒の読解の妨げとなります。教科書に明示されていない情報を読み取らせるための推論発問を行うとき、発問の答えを求めて生徒は繰り返し本文を読みます。教科書本文の複数の情報を関連付けて答えなければならないときは、ある程度まとまった長さの英文が必要です。

ウ 英語による授業展開

Classroom English、Teacher Talk と同様に、発問もできるだけ英語で行いましょう。未習の言語材料でも、生徒は文脈から判断できます。Teacher Talk が良質のインプットとなり、Teacher Talk を使って表現したり、さらには推論発問の根拠にしたりしています。事実発問に関しては、英語で行う方が生徒への認知負荷が低く、学習熟達度にかかわらず生徒の正解率が高いことも明らかになりました。聞き取れた英語を基に本文の検索読みを行い、答えとなる箇所を探しやすいためだと考えます。

エ 発達段階に応じた単元ゴールの設定

単元ゴールには、生徒の表現力を評価するパフォーマンス課題を設定します。表現力は生徒の産出した英文の質・量で測ります。表現の能力は「書くこと」「話すこと」「読むこと（音読）」で評価することができます。生徒の発達段階に応じたパフォーマンス課題を設定しましょう。3年生は、「書くこと」の領域で表現の能力を評価し、正確さを求めることもできます。登場人物の生き方を通して自分を見つめ直すような評価発問を投げ掛けることも可能です。1年生であれば、「なりきり音読」を単元ゴールに設定することもアイデアの一つです。「読むこと」の領域で表現の能力を評価します。段階に応じて「話すこと」「書くこと」におけるパフォーマンス課題を設定していきましょう。

オ 「表現の能力」と「理解の能力」の関連

語い力や文法の知識も十分ではない1年生が、本文を基に「なりきり音読」で原稿となるガイド文を自分たちで作りました。表現の能力が十分満足できる状況であると判断できるならば、理解の能力も十分満足であると判断できます。読みの深さや思考の高まりを、生徒が話したり書いたりする英語（英作文・音読）で評価することができます。

(4) 終わりに

平成27年度は、みやき町立北茂安中学校、鹿島市立西部中学校において、研究委員の先生方に研究テーマに基づく授業を実践していただきました。さらに、平成28年度は、みやき町立中原中学校と鹿島市立西部中学校において、公開授業研究会を行い、多くの先生方に参加していただき、貴重な御意見、御感想を頂きました。

本研究に御協力いただきました公開授業研究会場校の先生方と、公開授業研究会へ御参会いただきました先生方へ厚く御礼申し上げます。